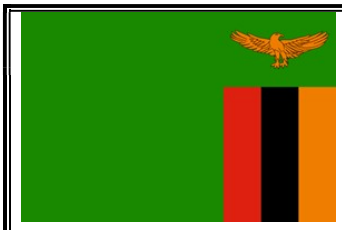
JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット



Zambia

学校名：杉戸町立杉戸小学校

氏名： 佐藤 英恵

［担当教科：全科目（音楽以外）］

- 実践教科等： 社会・総合・国語・道徳
- 時間数 ： 5時間
- 対象生徒 ： 4年生
- 対象人数 ： 38人（115人）

1 単元名

世界の国々に目を向けよう

2 単元の目標

・写真を見て話し合ったり考えたりすることで、ザンビアやほかの国々の現状や諸問題について興味・関心を持ったり、自分の生活と結びつけて今後の行動について考えたりする。（進んで参加する態度）

・ザンビアの文化や生活、歴史言語などを知ることによって、自国の文化や生活とつなげて考えたり、共通点や相違点を知り、多様な生き方や考え方に興味をもったりすることで、理解し許容する態度を養う。（つながりを尊重する態度）

3 単元の指導について

（１）教材観

この教材は、日本と「同じ・違う」を視点として比べることで、様々な国に興味をもち、他者を理解し許容する態度を養うことをねらいとしたものである。学習指導要領に即して、４年生の教科書教材や設定されている単元に、国際理解教育の要素を取り入れて実践することで、それぞれの単元の学習がさらに深まるとともに、国際理解の視点を養うことができると考える。４年生の発達段階や実態を踏まえ、写真や実物などを用いて、実際に見たり、ふれたりしながら班で話し合う活動を取り入れ、４年生なりに世界の国々に目が向けられるような児童の育成を目指したい。

（２）児童観

児童は、何事にも興味が高く、特に様々な事柄において「なぜだろう」、「どうしてそうなるのか」等、もっと深く知りたいという知的好奇心が高まっている。また、そのためにそのためにパソコンや本を使って調べたり、話し合ったりする活動に意欲的である。児童は４年生から、毎時間の社会科の授業で地図帳を使って県名や国名を調べ、その周辺の絵や地図記号などから土地利用の様子や名産物、特徴について発表する活動に楽しみながら取り組んでいる。また、今年度の青少年読書感想文コンクールにおける中学年の課題図書、「すごいね！みんなの通学路」の読み聞かせを聞き、世界の様々な国の現状に関心が高まっている。

（３）指導観

全体を５時間扱いとし、１時間目にザンビアのクイズウォークラリー、２時間目に総合学習と関連する水とごみについて学習することで、興味関心を高めるとともに、日本との違いに視点を向けさせたい。その際、「かわいそう、日本に生まれてよかった」などの考えも予想される。そこで、２時間目から５時間目では、アップとルーズで様々な角度からザンビアを眺めたり、世界で活躍する日本人を知る学習をしたりすることで、日本と同じところや自分たちにできることへ自然と目を向けさせたい。授業では毎時間ペアやグループで考える活動を取り入れ、児童が主体的に学び進めていく授業展開としたい。

4 評価規準

観点 【1 社会】	社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
評価規準	ザンビアの国の様子に興味をもち、日本とくらべながら意欲的に考えようとしている。	クイズを通してザンビアの国の現状や抱える課題を捉え、自分ができることについて考えている。	地図や資料を活用し、日本とザンビアをくらべて、まとめようとしている。	日本の文化や人々の生活の様子と、ザンビアの文化や人々の生活の様子を理解している。
観点 【2 総合】	自ら学ぶ力	表現する力	共に生きる力	
評価規準	水やごみについて、日本とザンビアなどの国々を比べて考えたり、新たな疑問や考えを持ったりすることができる。	調べたことや考えたことを、分かりやすくまとめることができる。	世界のみんなが共生していく中で、自分と違う考えや文化を受け入れ、相手の立場を尊重することができる。	
観点	ア 国語への関心・	ウ 話す・聞く能力	エ 読む能力	オ 言語についての

【3 国語】	意欲・態度			知識・理解・技能
評価規準	説明文で読み取ったことをもとに、分かること、分からないことを見つけようとしている。	写真から分かること、分からないことについて出し合い、話し合いながら分類している。	「アップ」と「ルーズ」の使われ方を見て、説明するうえでのよさを考えている。	
評価方法	付箋やワークシートの記述・発言	話し合いの様子		

評価規準 【4 道徳】	二人の女性の生き方を通して、自国と外国の違いを認識し、どのように外国の人とかかわっていきたいか考えることができる。
評価方法	発言・観察・記述（ワークシート）
評価規準 【5 道徳】	ザンビアにおける二つの国際協力の活動と違いを知り、国際協力によって日本が世界に貢献していることの意義について理解できたか。
評価方法	発言・観察・記述（ワークシート）

5 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
事前	世界の国々について知ろう （各教室）	世界の国々に興味をもつ。	・平成30年度読書感想文コンクールの課題図書『すごいね！みんなの通学路』の読み聞かせを聞いて、様々な国や人々に興味をもつ。 ・毎時間の社会科の授業で地図帳を使って県名や国名を調べ、その周辺の絵や地図記号などから土地利用の様子や名産物、特徴について発表する。
1 社会	世界の国々について知ろう （各教室）	ザンビアを知り、日本と比較して共通点と相違点を考える。	・地図帳で国名クイズ（国の位置調べ） ・面積・人口・国旗・特産物・貿易・言語・教科書などについての8つのクイズを、ウォークラリー形式で班ごとに回りながら実際に見たり触れたりして解く。 ・日本とザンビアの共通点や相違点について考える。
2 総合	世界旅行へ出かけよう ～水とごみ～ （学年合同）	ザンビアの水とごみの現状を知り、日本と比較して共通点と相違点を考える。	・世界旅行と題して、ザンビアや世界各地の国を回りながら水とごみについての現状を聞く。 ・社会と総合で学習したり調べたりした日本の水やごみの現状と比較して考え、記述する。 （次時以降に行う総合のまとめの新聞の中に、比較したことを一つ以上記事として入れる。）
3 国語 (本時)	アップとルーズを使って、ザンビアについてもっと知ろう	「アップ」と「ルーズ」で伝えられることの違いを学習したことを生かして、ザンビアの様子や、伝えたい思いについて考える。	・国語「アップとルーズで伝える」で、アップとルーズで伝えられるそれぞれのよさについて知ったことを生かして、アップとルーズの様々な写真を提示し、感じたことや考えたことを発表する。 ・ボックスチャート（思考整理ツール）を活用し、分かることには赤の付箋、分からないことは青の付箋に記述し、分類・整理することで考えを広げたり深めたりする。
4 道徳	国のちがいをこえて ①		・導入で日本の文化と他国の文化で違うところがあるかを問い、「国や文化の違いを受け入れるとはどういうことだろう。」と考えさせる。 ・タイから日本に来た花岡さんと、日本からバングラディッシュに行った山口さんの話から、それぞれのすごいと思ったところを考えたり、二人の考えで似ていることは何か考えさせたりして、どちらも国は違っても仲良くしたい、その国のことが好き、という気持ちが共通していることに気づかせる。 ・終末に児童に描いてもらった虹と、ザンビアの子どもたちに描いてもらった虹の絵を見て気付いたことを発表させる。
5 道徳	国のちがいをこえて ②		・今までの学習で知った、ザンビアが抱える問題を受け、ザンビアで活躍する二人の日本人を紹介する。 ・二つの国際協力の違いについて考える。物を与える協力も、物を与えない協力も、どちらもザンビアの人とより良いものを目指す中で行われていることであることに気づかせる。 ・今まで学習したことを振り返り、最初に感じていたアフリカやザンビアのイメージと、今のイメージで変わったことや、感じたことについて書く。

６ 授業事例の紹介

小単元名【 複合単元 アップとルーズで伝える／クラブリーフレットを作ろう 】

【本時までの展開】指導と評価の計画（15 時間）

次	時	○主な学習活動 ・学習内容
第一次	1	○教師が作成した「委員会リーフレット」を見る ○学習課題「３年生をわくわくさせるクラブ活動リーフレットを作ろう」を設定し学習計画を立てる。 ・学習の見通し ・紹介する相手（３年生）と方法（リーフレット） ○題名読み ○初発の感想を書く。（ペア→全体） ○初発の感想を交流する。 ○インタビューのしかた、写真のとり方 ○段落分け
第二次	2	○段落の順序を確認しながら、段落の構成を理解する。 ・1、2、3段落の内容と関係 ・問い ・写真と文章の関係 ・上手な説明の仕方
	3	○段落の順序を確認しながら、段落の構成を理解する。 ・4、5、6段落の内容と関係 ・アップで伝えられること、伝えられないこと ・上手な説明の仕方
	4	○文章全体の構成を捉える。 ・段落構成図
	5	○「アップとルーズで伝える」の全文を読み、筆者が用いている説明の工夫についてまとめる。 ・対比、写真、接続語、文末表現、文章構成
	6	○新聞や雑誌などでアップとルーズの使われ方を見つけ、説明するうえでのよさを調べ、報告し合う。 ・「アップ」「ルーズ」のそれぞれのよさ ・文章と写真との関係 ・記者の伝えたいことに合わせた写真選び
	7 本時	○「アップ」と「ルーズ」で撮影されたザンビアの写真を見て、伝えたい思いを考える。 ・同じ場所での「アップ」「ルーズ」の撮り方による見え方の違い ・写真にこめられた意図（伝えたいこと） ・写真の撮り方と選び方（自分の伝えたいことが伝わるか）
第三次	8	○教科書の例を参考に、リーフレットの書き方を考える。 ・「はじめ」クラブのよいところ ・「中」アップとルーズで説明 ・「終わり」まとめ ・文章表現の工夫
	9	○構成メモを作り、文章の構成を考える。 ・文章表現の工夫
	10	○リーフレットの「中」を書く ・構成メモから文章に組み立てる（ペア交流） ・文章表現の工夫を生かして書く ・推敲
	11 12	○リーフレットの「はじめ」と「終わり」、「表紙」、「裏表紙」を書く。 ・「はじめ」「おわり」 ・「表紙」（クラブ活動名） ・「裏表紙」（クラブが行われる時間・場所・人数・活動内容）
	13	○書いたリーフレットを友だちと読み合う。 ・分かりやすい文章の書き方 ・友だちの文章のよさ
	14	○３年生にクラブリーフレットの発表をし、感想をもらう。 ・紹介の仕方 。３年生の感想を読んでの振り返り
	15	○単元の学習を振り返る。 ・単元全体を振り返って（楽しかったこと・頑張ったこと・できるようになったこと・生かしたいこと）

（1） 指導案

（ア）実施日時 １０月１７日（水）第３限

（イ）実施会場 ４年３組教室

（ウ）本時の目標

『アップとルーズで伝える』で学習したことをもとに、ザンビア「アップ」と「ルーズ」の写真から分かることと分からないことを考えるとともに、同じ場面でも写真の選び方により伝わり方が違うことを理解する。

（エ）指導のポイント

・アップ、ルーズそれぞれの分かること、分からないことについて考え、話し合いながら分類・整理するために、付箋を活用する。

・2枚の写真で見え方が違うことを実感させるような写真選びと提示の仕方を工夫する。

（オ）本時の展開

過程・	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
５分	１ 前時までの学習を想起し、本時の学習内容を確認する。	○単元のゴールの確認 ○単元の学習計画表をもとにした、前時及び本時の学習内容の確認 ○本時のめあての確認	一斉	・前時までに「アップとルーズで伝える」の全文を読んで、説明の工夫についてまとめ、新聞記事から「アップ」「ルーズ」の使われ方とそのよさについて考えたことを想起し本時の課題を意識させる。 ・【アップからルーズ】アップだと日本と変わらな	
	ザンビアの「アップ」と「ルーズ」の写真から、伝えたいことは何か考えよう。				
	２ 本時の学習課題を解決する。	○グループごとに写真を提示する。			

	（1）写真を見て気付いたことを付箋に書く。 （2） 付箋に書いたことを、グループ内で発表し、話し合う。 （3）話し合ったことを全体で発表する。 （4）どんな写真か、 ３本時の学習を振り返る。	【アップからルーズ】 （写真①ゾウ） （写真②料理） （写真③市場） （写真④トラック） （写真⑤サッカー） （写真⑤教室１） 【ルーズからアップ】 （写真⑥教室２） 【アップからルーズ】 （写真⑦水くみ） （写真⑧ストリートチルドレン） 〇付箋の色 ・赤…写真から分かること ・青…写真から分からないこと 〇意見の分類・整理 〇二つの写真から見て、分かること 〇振り返りの記入 ・友だちと話し合って	グループ グループ	かったり、疑問に思わなかったりする写真を提示し、その後ルーズの写真を提示することで、日本との違いやそれぞれの国のよさなどに気付かせる。 ・【ルーズからアップ】ルーズで見ると日本と違うが、アップで見ると同じであることや、ルーズで見えなかったものがアップで見えてくることで、日本との違いやそれぞれの国のよさなどに気付かせる。 ・似ている意見の順に発表させることで、意見を比較しながら聞くようにする。 ・本時のめあてに沿ったふり返りをするように助言するとともに、具体的に何がどのように分かったのか、友達の意見のどんなところがよかったのかなどについて書くように助言する。 □振り返りの書き方の例を示し、めあてに沿った振り返りができるようにする。 〇数名の児童に発表させる。 〇クラブのアップとルーズの写真から分かることを付箋に書くことを伝え、次時の学習に意欲を持たせる。	・説明文で読み取ったことをもとに、分かること、分からないことを見つけようとしている。 【国語への関心・意欲・態度】 付箋やワークシートの記述・発言 ・写真から分かること、分からないことについてグループで出し合い、話し合いながら分類している。 【話す・聞く能力】 話し合いの様子
期待する学習の振り返り ・同じ場所でもアップとルーズによって伝わり方がちがう。 ・アップで見ると日本と同じでもルーズにするとちがう見え方があると思った。					
	告をする。	〇次時の学習内容			

（2）授業の振り返り

【本時の成果】

・国語の「アップとルーズで伝える／クラブリーフレットを作ろう」を複合単元として扱う中で、前時までの説明文の読み取りで学習した、アップとルーズの違い、アップとルーズのそれぞれのよさ、新聞やテレビではアップやルーズを伝えたい意図に合わせて選択していることなどを本時の授業で実感することができた。それによって、その後のクラブ活動リーフレット作りで写真を選ぶ際や、写真から分かることを書く際に生かすことができた。

・各グループに「アップからルーズ」または「ルーズからアップ」のように意図的に、また順番に写真を提示したことで、ザンビアと日本の違いを児童自身で見つけたり、違っていることを感動や驚きをもってうけとめたりすることができた。

・写真から分かること、分からないことについて、付箋を使って整理して話し合うことで、グループで自分の意見を発表したり共有したりすることができた。

【本時の課題】

・グループの人数を3～4人として話し合いは活発となったが、様々な写真を提示したいと、それぞれのグループに違う写真を提示したことで、すべてのグループの活動や発表の見届けが難しかった。また、発表に時間がかかってしまったため、それぞれの写真を見て感じたことや共通点、相違点などについて話し合う時間を十分に取ることができなかった。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

（3）使用教材

第１時：チテンゲやお金（実際に触れさせる）

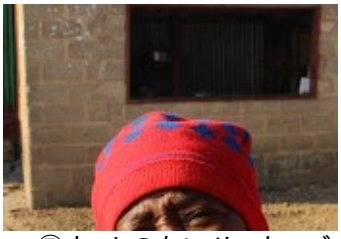
第２時：ザンビアで撮影した写真や、CDロムの写真

第３時：【アップ→ルーズ】で提示した写真

①ゾウ（国立公園）

②食事（ムテバ村・丸森町プロジェクト）

③道端での販売（ルサカからリビングストンの車内から）



④トラックの荷台に乗る様子

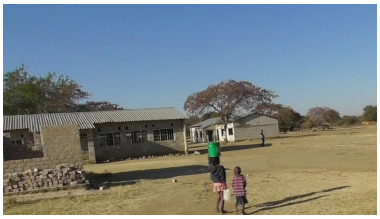
⑤ネットのないサッカーゴール（学校の校庭）

⑥かけ算の筆算の学習（小学校の教室）

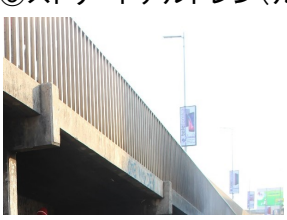
第３時：【ルーズ→アップ】で提示した写真

⑦教室の掲示物や学習の様子（学校）

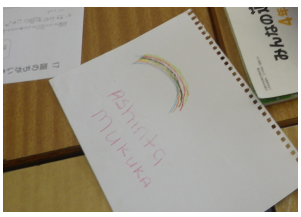
⑧水くみ



⑨ストリートチルドレン（ルサカの橋の下）



第４時：虹（小・中学校の児童・生徒が書いたもの）



7 単元をとおした児童生徒の反応/変容

児童は様々な国の通学路の様子が描かれている『すごいね！みんなの通学路』の読み聞かせを聞き、日本とこんなにも違うことに驚くと同時に、「かわいそう」「日本は恵まれている」といった感想が多くありました。様々な教科にわたってこの実践をするにあたって、ただ「かわいそう」「遠い国のこと」ではなく、少しでも「こんな違いもあるんだ。分かってあげたい」「おもしろいな」「もっと知りたい」といった、違いにある豊かさの視点に気づかせたいと考えたため、このような単元構成とした。1時間目では、聞いたことのない「ザンビア」という国について

8 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

段階	項目
P 計画	・ザンビアでの研修で得たことや写真・メモなどの資料を見直し、授業の構想を練る。 ・国際理解教育の視点における授業のねらいとして、「他国の諸問題（特に水・ごみ問題）に関心を持つ」「ザンビアと日本との共通点・相違点に気付く」「他国の生活や文化を理解し許容する態度を養う」とする。 ・国際理解教育の視点における授業のねらいと、児童の実態や発達段階、関連する教科や単元のねらいにあった授業計画や手立てを考える。 ・再度ザンビアの研修で得たことや資料・メモを見直し、ねらいに応じて使用する資料を厳選した。
D 実施	・1学期から読み聞かせや地図帳を使った授業等、児童の実態や問題意識について把握した。 ・第1時では、ウォークラリー形式でクイズを解くことで、主体的にザンビアの現状を考えさせた。 ・第2時では、「世界旅行に出かけよう」と題し、社会科と総合の内容である水とごみについて、ザンビアだけでなく様々な国の現状をクイズ形式で提示した。学習したことから、自分のテーマにかかわる内容を総合の新聞の記事としてまとめるという目的意識を持たせたことで意欲的に取り組んだ。 ・3クラスで授業をしたため、児童の反応や興味関心を見ながら提示する資料等を改善していった。
C 検証	・5時間の学習を、それぞれの教科・単元の中に位置づけたことで、国際理解教育の視点における授業のねらいを達成できたとともに、それぞれの教科の学習の内容がより深まる手立てともなった。 ・それぞれの教科に位置づけたため、5時間がバラバラにならないように毎時間ねらいにあった振り返りの時間を設けるとともに、毎時間のワークシートを用意し、貼りためて1冊の本にまとめた。 ・様々な教科、単元にわたって授業を行い、またその授業で使用したものやザンビアの教科書などの資料を廊下に「ザンビアコーナー」として掲示したことで、5時間の授業内だけでなく様々な授業の中で国際社会に興味をもった発言や質問があり、国際的な視野が広がった。
A 改善	・国際理解教育と単元のねらいなどの両方を十分理解した上で授業をすることが求められる。そのため、研修先で学んできたことを生かしたうえで、4年生という発達段階と、教科や単元のねらいに合わせた授業を考えるのが難しかった。 ・ザンビアという遠い国のことについて身近に感じさせる必要性を感じた。そのためには、5時間の授業だけでなく、この1年間だけでなく、常にどの教師も国際理解教育の視点を意識して授業などを行う必要がある。（例えば、日々のニュースの話題から朝や帰りの会での先生の話や、道徳などの授業、給食のメニュー等における食育、交換留学生の受け入れの時など）

9 教師海外研修に参加して

今回研修に参加して、私がアフリカに抱いていたイメージを変えるような経験が多くありました。これらもアフリカの一面ではありますが、ほんの一部であり、きっとまだまだ知らないことがたくさんあるのだろうと感じました。知らず知らずのうちに、自分が知っているイメージ、見たことのあるもの、感じたことのあるものがすべてだと思いがちでしたが、価値観を覆された体験でした。ザンビアにおける様々な問題も、私が思っていたものよりももっと多岐にわたり、それらが複雑に絡み合っていることも知ることができました。解決していくためには、学校教育に加えて、このような国際協力も含めた人材育成、広い意味での「教育」が、ひいてはこれらの問題の解決につながっていくと感じ、教育の大切さを改めて考えることができました。つまり、私の教師という仕事の責任の重さや大切さも再認識することもできました。教師として私ができることは、学習指導要領の内容をふまえ、児童の発達段階や興味関心などの実態を十分に把握し、効果的な方法や形態で授業化していくことだと考えます。授業によって国際理解の「種」をまき続け、1回の授業で完結せず、毎年児童に合わせて授業化し、「種まき」や「水やり」を続けることによって国際協力の芽を大きく育てていくことが、未来の国際協力の人材育成につながっていくと考えます。教師という職業だからこそ行うことのできる「国際理解教育の授業の推進」を国際協力の一つと考え、今後も実践していきたいです。